宮城県文化財調査報告書第209集

市川橋遺跡の調査

―― 県道『泉－塩釜線』関連調査報告書Ⅵ ――

平 成 19 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会
宮 城 県 土 木 部

宮城県文化財調査報告書第209集

市 川 橋 遺 跡

―― 県道『泉－塩釜線』関連調査報告書Ⅵ ――

序　　文

ゆとりや豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保存・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、一方では道路建設や宅地造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、大規模なほ場整備などの各種開発事業も年を追うごとに増加しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきております。なかでも土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には貴重な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は、開発関係機関等との保存協議に基づき、県道泉塩釜線の道路改良工事に伴って平成15～17年に実施した「市川橋遺跡」の発掘調査報告書です。本書が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成19年３月

宮城県教育委員会

教育長　佐々木　義　昭

例　　言

1．本書は、宮城県仙台東土木事務所が担当する県道「泉－塩釜線」バイパス建設（岩切－玉川線ほか）工事に伴う『市川橋遺跡』の発掘調査のうち、平成15～17年に実施した調査結果をまとめたものである。

2．調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。

3．本書の作成にあたっては、調査員全員の協議検討を経て、大和幸生　佐藤貴志が執筆・編集を行った。

なお、第Ⅰ章、第Ⅱ章１については、「市川橋遺跡の調査－県道『泉－塩釜線』関連調査報告書Ⅲ－第一部：本文編」の「第Ⅰ章」・「第Ⅱ章１」を転載・加筆・修正して使用した。

4．本書における土色の記述には「新版標準土色帳」（小山・竹原1993）を利用した。

5．本書の第３図は「仙塩広域都市計画図（縮尺＝1/2,500）」（平成13年３月作製　多賀城市建設部都市計画課提供）を利用した。

6．遺構平面図に付した座標値は、日本測地系第Ｘ系（旧測地系）による。いずれも方位は座標北を表しており、磁北との偏差は西に8°30′40″である。

7．遺構略号は次の通りで、通し番号で各遺構に付した。

SD：溝跡・河川跡　SF：水田跡、土塁状遺構　SX：整地層

8．発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品については、宮城県教育委員会が一括して保管している。

調　査　要　項

遺　跡　名：市川橋遺跡（宮城県遺跡記載番号：18008）

遺 跡 記 号：ES

所　在　地：宮城県多賀城市市川字館前・後山

調 査 原 因：県道「泉－塩釜線」バイパス建設（岩切－玉川線ほか）工事

調 査 主 体：宮城県教育委員会

調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課

調 査 期 間：平成15年10月１日～11月６日（確認調査）

平成16年10月18日～11月５日（事前調査）

平成17年11月１日～11月24日（事前調査）

調 査 担 当：平成15年度　吉野　武　西村　力　田中政幸

平成16年度　菊地逸夫　須田良平

平成17年度　大和幸生　佐藤貴志

調 査 協 力：宮城県仙台東土木事務所

目　　次

第Ⅰ章　調査の経緯…… 1

第Ⅱ章　遺跡の概観…… 1

1　遺跡の位置と地理的環境…… 1

2　歴史的環境…… 3

第Ⅲ章　発掘調査…… 4

1　調査の方法と経過…… 4

2　調査区内の層序…… 5

3　調査の成果…… 6

(1) 館前北地区…… 7

(2) 後山地区……10

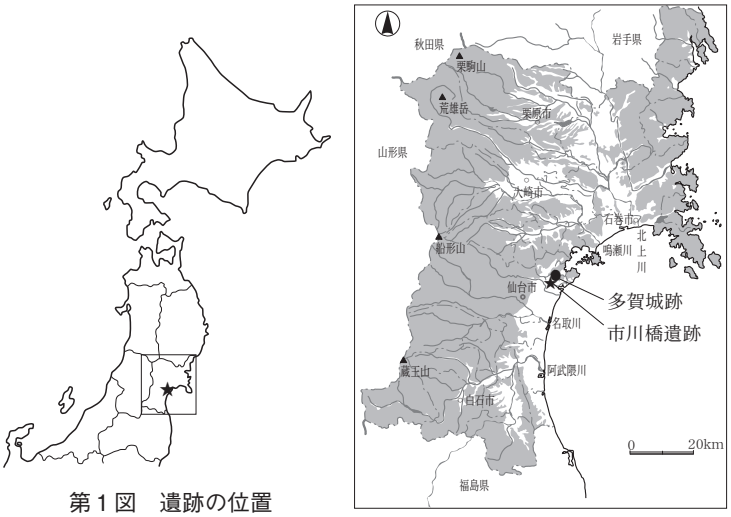
第Ⅳ章　まとめ……16

引用・参考文献……17

写真図版……20

第Ⅰ章　調査の経緯

昭和47年～昭和52年にかけて、太平洋岸沿いの三陸自動車道に連結する仙台湾高規格幹線道路事業計画が立案・検討された。この中で、仙台市宮城野区中野から宮城郡利府町春日までの「仙塩道路」の建設計画が決定した。計画では、この仙塩道路は特別史跡「多賀城跡」の西側に沿って、多賀城跡の南面に位置する市川橋遺跡・山王遺跡などを縦断するものであった。また、山王遺跡八幡地区には仮称「多賀城インター」も敷設される計画となった。



第１図　遺跡の位置

一方、この仙塩道路と交差する県道「泉－塩釜線」のバイパス的な機能をもった都市計画道路（「岩切－玉川線」ほか）の建設計画も同時に決定された。この都市計画道路は、仙塩道路の多賀城インターにアクセスするものであり、今回調査の対象となった市川橋遺跡および西の山王遺跡を東西に横断するというルートであった。

こうした経緯を受けて、県道「泉－塩釜線」バイパス建設（岩切－玉川線ほか）工事に伴う発掘調査が平成４年度（1992）から実施されることになった。この都市計画道路は、当初、盛土工法による４車線（路幅30m）の計画であったが、その後変更されて暫定２車線開通ということになった。

平成４年度（1992）から西隣の山王遺跡八幡地区の調査が開始され、発掘調査は山王遺跡と市川橋遺跡の間を南流する砂押川沿いから西へ向かって順次進められた。翌平成５年（1993）にも引き続き同地区において調査が行われた（宮城県教育委員会1994、以下県教委と表記する）。平成７・８年度（1995･1996）にはさらに西側の同遺跡八幡地区・町地区の調査が行われた（県教委1998）。平成７（1995）～10年度（1998）には、「多賀城」外郭南辺の南側にあたる市川橋遺跡館前地区・矢中地区の調査が実施された（県教委2001）。また平成14・15年度（2002・2003）には、平成8年度実施の山王遺跡町地区のさらに西側の山王遺跡伊勢地区の調査が行われた（県教委2004）。そして、平成16年度は市川橋遺跡館前北地区、平成15・17年度は後山地区の調査を行うこととなった。館前北地区は平成７～10年度に実施した館前地区の北側に接する場所で、道路本線に付属する側溝の集水枡設置に係る事前調査であり、後山地区は矢中地区の東側に位置する４車線時の道路本体に係る確認調査と２車線部分の事前調査である。

第Ⅱ章　遺跡の概観

１　遺跡の位置と地理的環境

市川橋遺跡は、宮城県仙台市の中心部から北東へ約10km、多賀城市街の北西部に所在する古代の

1 市川橋遺跡　（縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世）
2 特別史跡多賀城跡　（奈良・平安）
3 山王遺跡　（弥生、古墳、奈良・平安、中世、近世）
4 新田遺跡　（縄文、古墳、奈良・平安、中世、近世）
5 高崎遺跡　（縄文、古墳、奈良、平安、中世、近世）
6 館前遺跡　（古代、中世）
7 郷楽遺跡　（縄文～中世）
8 八幡崎Ｂ遺跡　（縄文～平安）
9 柏木遺跡　（縄文、古代）
10 燕沢遺跡　（縄文～奈良・平安）
11 岩切畑中遺跡　（縄文～平安、中世、近世）
12 鴻ノ巣遺跡　（弥生～中世）

第２図　市川橋遺跡と周辺の遺跡

陸奥国府「多賀城跡」の南～南西部に位置する。標高約２～３ｍの水田地帯に、東西約1.4km、南北約1.6km、総面積約703,000㎡にも及ぶ広大な遺跡である。遺跡の中心部をJR東北本線が東西に横断し、西側を三陸自動車道へと至る仙塩道路が南北に縦断する。また、遺跡の北側では東西方向に仙台市と塩竈市を結ぶ県道「泉－塩釜線」が走っている。

遺跡は、縄文時代から中世まで長期間にわたって断続的に営まれているが、一般的には古墳時代～奈良・平安時代を中心とした遺跡として知られている。特に、古代においては陸奥国府「多賀城」と密接な関係を持ち、西側に隣接する山王遺跡とともに多賀城の場外にあって方格地割りに基づいた街並みを形成していた区域であったことが明らかになっている（県教委1995　多賀城市教育委員会1999）。この一帯は、これまで大部分が水田として利用されていたが、近年では宅地造成や道路整備に伴い、その景観は大きく変貌しつつある。

地形的にみると、遺跡は仙台平野の北端部、砂押川左岸の丘陵地から沖積地への移行する低地上に立地している。遺跡の北～東部にかけては陸前丘陵から派生する、緩やかな起伏を持つ多賀城台地が広がる。この多賀城台地は標高50mほどで、東の塩釜・松島方面へと高度を緩やかに上げながら連続している。この台地の南西端には「多賀城」が所在する。本遺跡の西～南側には砂押川が南流しており、低平な沖積地が広がっている。

２　歴史的環境

本遺跡周辺には奈良・平安時代の陸奥国府多賀城跡をはじめとする多数の遺跡がある。本遺跡を含む近年の調査成果から弥生時代～近世までの周辺の様子が次第に明らかになってきている。以下、今回の本調査と関連する古墳時代～中世までの様子について記してみたい。

〈古墳時代〉

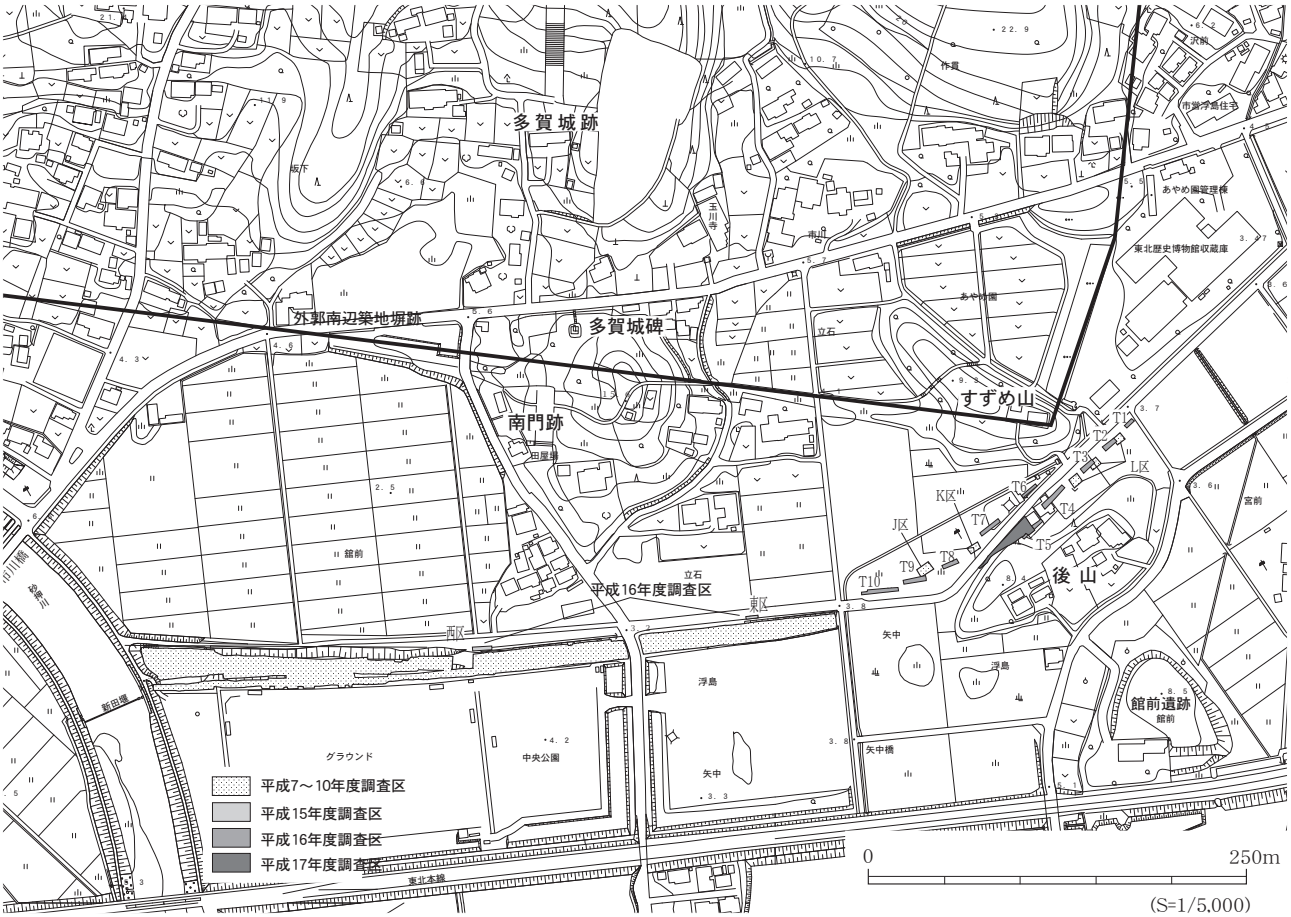
古墳時代前期には、本遺跡の北から東の丘陵上や西側の自然堤防上の山王遺跡に集落や墓域が営まれていたことが確認されている。中期になると、本遺跡の西側に位置する新田遺跡後地区、山王遺跡東町浦・西町浦地区、山王遺跡八幡地区などで竪穴住居跡が発見され、自然堤防上に集落が存在したことが明らかになった。八幡地区では鍛冶工房跡が確認され、鍛冶生産技術を備えた集落の様子が判明した。後期になると山王遺跡八幡・伊勢地区や館前地区、新田遺跡後地区などでは旧河川に挟まれた微高地上からさらに多くの竪穴住居跡が発見され、大規模な集落が営まれていることが明らかになった。なかでも八幡地区の旧河川跡からは柄香炉やト骨・斎串など祭祀に関わる遺物や在地産の須恵器が定量含まれることや区画施設の存在から、この地域の基幹的集落とみられている（県教委1994）。

〈奈良・平安時代〉

神亀元（724）年に陸奥国支配の根拠地である「多賀城」が、本遺跡北側の丘陵上に築かれる。多賀城は一辺670～1000mの不整な方形の範囲を築地塀で囲み、ほぼ中央に政庁が置かれ、周囲には実務官衙が配置されている（県教委・宮城県多賀城跡調査研究所1982）。城外では、南東約1.2kmの丘陵上に付属寺院の多賀城廃寺がある。

一方、多賀城の南から西に広がる本遺跡や西側に隣接する山王遺跡には多賀城外郭南門から南に延びる南北大路や外郭南辺に並行する東西大路が８世紀末には整備され、９世紀代には東西約1.5km、南北約0.8kmにも及ぶ約１町四方の方格地割りによる町並みが形成されていることが明らかになっている。これまでの調査では、南北大路の西側には、東西大路の西延長をはじめ南北・東西の小路が発見され、方格地割りが存在したことが明らかになってきているが、一方、東側は低湿地帯であるという地形的な制約から南西部のような広範囲に及ぶ方格地割りは存在しないものと思われていた。近年東１道路とみられる道路跡が発見され、東部域の地割りを考える上で重要な手がかりとなった（県教委2001）。

方格地割り内では、東西大路に接する山王遺跡千刈田地区や多賀前地区から、廂付きの大規模な掘立柱建物跡が発見され国司館跡と推定されている（多賀城市教育委員会1991・1992　県教委1996）。一方、方格地割り外の多賀城跡外郭南東隅付近の館前遺跡から四面廂付きの大規模な建物跡が発見され、国司館跡と考えられている（多賀城市教育委員会1980）。東西大路を離れた小路で区画されたところでは、敷地内部が道路や塀・区画溝で細分され、小規模の建物跡が主体になり、鍛冶作業や漆作業に使用したとみられる遺物が出土することから多賀城に関わる作業区域またはそれらに従事した人々の居住域であったと考えられている。また、中谷地地区では大規模な墓域を確認している（県教委2003）。



第３図　調査区の配置図

10世紀後半頃には多賀城が機能しなくなるとそれに連動して周囲の町並みも荒廃し、衰退していったものと考えられている。

〈中世〉

新田遺跡寿福寺地区で、溝で区画された屋敷跡が発見され、敷地内には大小の建物跡が計画的に配置され、施釉陶器や中国産陶磁器などの高級品が多量に出土していることから、上級武士階級の居館跡と推定されている（多賀城市教育委員会1992）。山王遺跡八幡・伏石地区でも同様の周囲に溝を巡らした屋敷跡が発見されていることから、自然堤防上に多くの屋敷跡が存在したものと考えられている（県教委1994）。

第Ⅲ章　発掘調査

1　調査の方法と経過

平成15～17年度に行った市川橋遺跡の後山地区と館前北地区の調査報告である。

平成15年度は、多賀城跡外郭の南東隅にある小丘陵（通称すずめ山）の南を東西方向に走る市道沿いに、４車線開通時の道路敷予定地約6,000㎡の範囲を対象として、詳細な確認調査を行った。この区域は、平成９年に部分的な確認調査（J・K・L区）が行われ、この区間については湿地帯で明確な

古代の遺構は検出せず、中世以降に一部水田耕作がなされた区域であることが判明している（県教委2001）。現道を除く予定地内に任意のトレンチ（Ｔ－1～Ｔ－10）を設け、遺構の有無を確認した。発見した遺構は国家座標系に基づく基準杭をもとに平板測量を実施し、1/250の平面図を作成し、併せて随時1/20の断面図を作成した。遺構の写真は35mm白黒フィルムを用いて撮影した。

平成16年度には､館前北地区において都市計画道路に付随する側溝集水枡設置に係る調査を行った。調査区は、平成7～10年度に調査を実施した館前地区の北側の隣接地にあたり、集水桝を設置する２箇所に調査区（西区、東区）を設定した。調査面積はそれぞれ約32㎡、約12㎡である。発見した遺構や調査区については、国家座標系に基づく基準杭をもとに西区は平板測量、東区は平面直角座標を組み、1/20・1/100平面図・断面図を作成した。遺構の写真は35mm白黒フィルムを用いて撮影した。

平成17年度には、平成15年度の確認調査の成果を受けて、道路予定地内の暫定２車線部分にあたる後山小丘陵の北側の事前調査を行った。調査対象面積は約250㎡である。発見した遺構や調査区については、国家座標系に基づく基準杭をもとに電子平板で測量した。また、併せて随時1/20の断面図を作成した。遺構の写真は800万画素のデジタルカメラと中判カメラを用いて撮影した。

以下、平成16年度に行った道路に付随する集水枡設置に係る事前調査と平成15・17年度に行った道路本体に係る確認・事前調査の成果を報告する。

２　調査区の層序

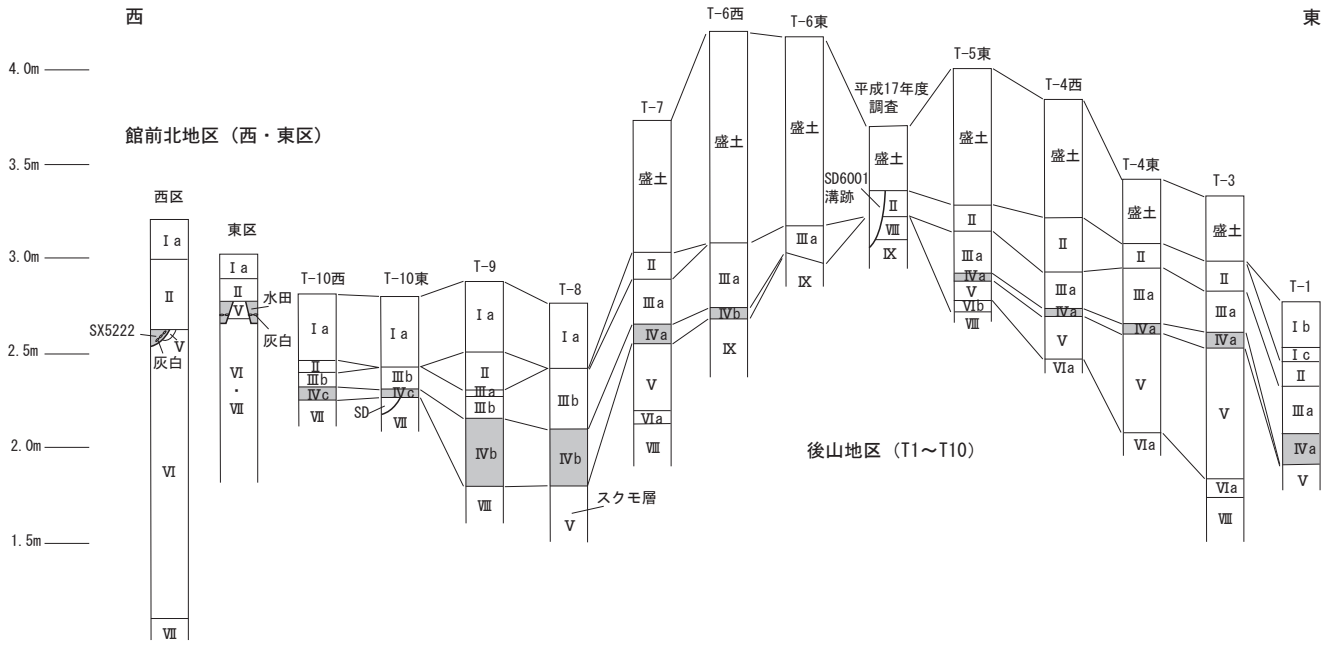
調査区の層序

今回の調査地点（館前北地区～後山地区）は東西に長く、標高３～４ｍの自然堤防上から後背湿地及び小丘陵地帯に細長く点在している。各調査地点の堆積状況は河川跡、湿地や丘陵部などが入り組んでいるため複雑である。また、後述するが後山地区には小丘陵の間に丘陵鞍部が延びていることが判明し、さらに堆積状況を複雑にしている。前回の館前地区の成果に今回の新たな知見を加え、大きく層序関係を捉えた。

Ⅰ層：現表土及び近代の水田。Ⅰａ層（層厚10～35cm）はＴ－8～館前北地区西区にかけて分布する現水田耕作土である。Ⅰｂ層（層厚23cm）はＴ－1付近に分布する現表土である。Ⅰｃ層（層厚８cm）はⅠｂ層の下位にあり、近代の水田耕作土である。また、Ｔ－3～7にかけてはⅠ層の上に35～110cmの盛土がなされている。

Ⅱ層：旧水田耕作土（層厚20cm）。灰白色火山灰降灰以降から近代以前の水田耕作土とみられる。暗オリーブ灰色～灰色のシルト質粘土～粘土である。Ｔ－6・8を除きほぼ調査区の全域に分布する。

Ⅲ層：灰白色火山灰降灰以降の自然堆積層。Ⅲａ層（層厚15～35cm）は褐灰色の粘土で、後山地区で見つかった丘陵鞍部を境に東側のＴ－1～Ｔ－5東と西側のＴ－6・7に分布し、いずれも丘陵裾周りのやや高い部分に分布する。これらは下層のⅣ層に含まれる灰白色火山灰をブロック状に含む灰白色火山灰降灰以降の水田耕作土である。Ⅲｂ層（層厚８～30cm）はＴ－8～10にかけて分布する黒褐色の粘質シルトである。有機物が未分解の状態のスクモ層を含む。前述の丘陵鞍部より西側には湿地性のⅢｂ層が堆積する。



第４図　調査区の層序

Ⅳ層：奈良・平安時代の堆積層。Ⅳａ層（層厚５～18cm）は、黒褐色の粘土で、層中に灰白色火山灰を含む。前述の丘陵鞍部を除き、東側のＴ－1～5東とＴ－7にかけて分布する。いずれも丘陵の裾周りのやや高い部分に分布する。Ⅳｂ層（層厚６～36cm）は、黒褐色のスクモ層で、丘陵鞍部の西側のＴ－6西・8・9にかけて分布する湿地性の堆積である。Ⅳｃ層（層厚４～７cm）は、褐灰色の粘土で、Ｔ－10付近に分布する。

Ⅴ層：奈良・平安時代の旧表土層（層厚10～70cm以上）。暗褐色のスクモ層で湿地性の堆積である。後山調査区やＴ－6付近の丘陵鞍部を境にして、東西に分布し、Ｔ－5東以東では徐々に厚さを増していく。同様に西側もＴ－7・8付近では西側に向かって厚さが増していく。

Ⅵ層：古墳時代の自然堆積層。Ⅵａ層（層厚10cm以上）は、黒色の粘土層で、Ｔ－3・4・7にかけて分布する。Ⅵｂ層（層厚10cm）は、明褐灰色の粘質シルトで、Ｔ－5東にみられる。これらはＴ－5西・6付近の丘陵鞍部のやや高い部分に分布し、西側はＴ－7で、東側はＴ－3～5東にみられる。Ⅵｃ層（層厚160cm）は、暗オリーブ色の砂質シルトで、館前北地区西・東区でみられ、旧河川に由来するとみられる水成の堆積層である。

Ⅶ層：古墳時代の自然堆積層。灰色の砂である。今回は掘り下げていないため不明であるが、西側の館前北地区に分布する。

３　調査の成果

15・17年度の後山地区の調査は同一の調査区、同一の遺構を取り扱うなど一連の調査であることから年度が異なるが調査地区毎に調査成果を報告する。最初に館前北地区について記す。

（1）館前北地区

西区では河川跡を２条確認した。出土遺物は少なく、縄文土器、土師器、須恵器、瓦、木製品などがある。東区では道路跡１条、水田跡１箇所、河川跡１条を確認した。遺物は土師器、須恵器など極少量で、SD5289河川跡から古墳時代中期南小泉式の土師器坏・甕などが出土した。以下、区ごとに説明を行う。

なお、以前調査した館前地区と今回の調査区は近接し、同一の遺構を取り扱うことから、遺構番号は以前の遺構番号を用いた。なお、新たに見つかった遺構については、新しい番号を付した（SD6100・6101河川跡）。

１）西　区（第５図）

【SD6100河川跡】

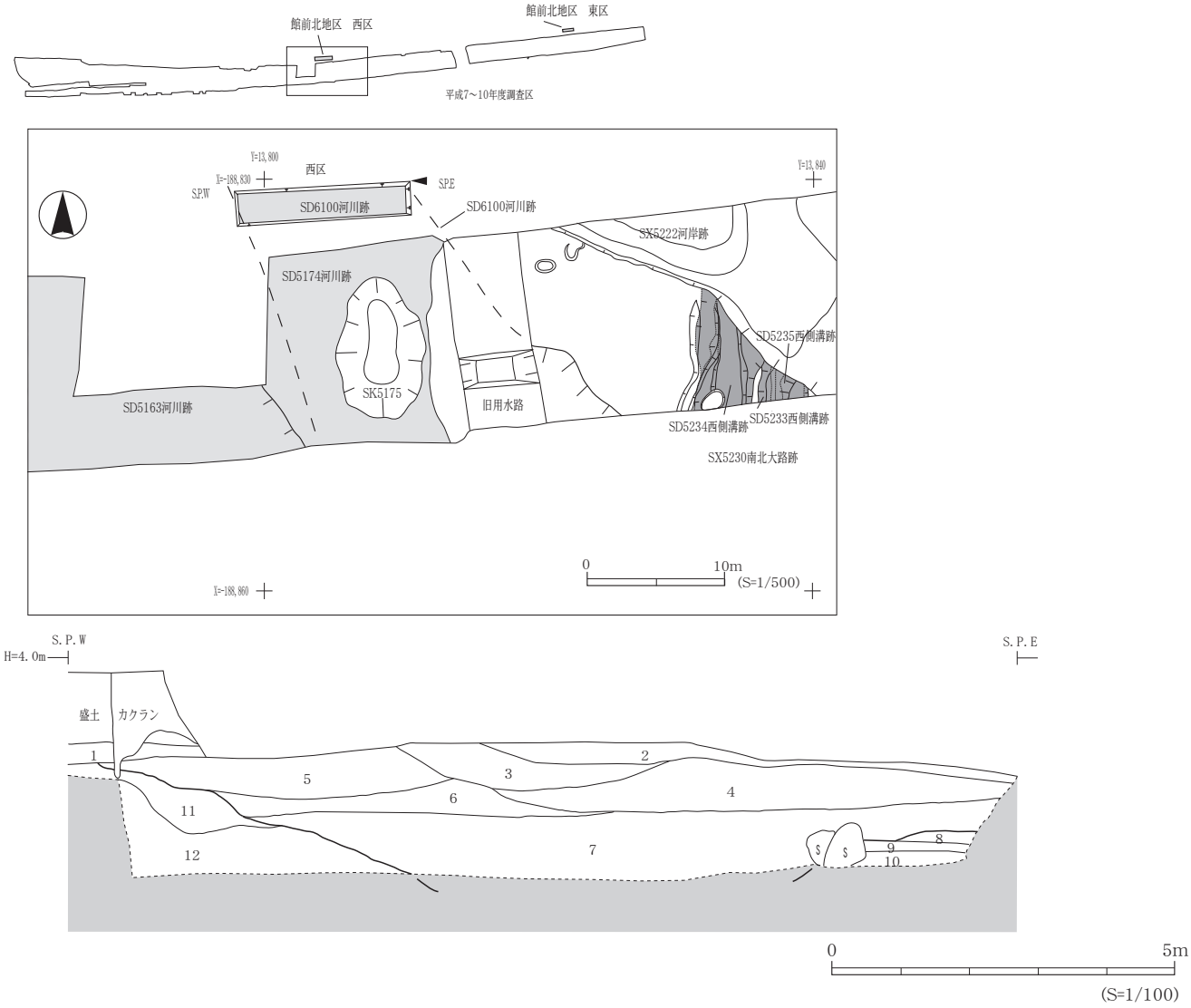
最近の盛土直下で検出した。以前の調査では河川跡と認識していなかったが、検出の状況から河川跡と考えられる。幅13m以上、深さ２m以上である。工事の及ばない深さについては、調査区が狭く、調査区の壁が崩落する危険があるため底面まで掘り下げていない。以前の調査では旧用水路を挟んで遺構確認面が異なっていたために、西側は遺構検出時に削平を受けて失われ、東側は旧用水路東脇の落ち込みのラインが相当するものと考えられる。堆積土はオリーブ黒色～灰オリーブ色の粘質シルト・砂で、いずれも自然堆積である。遺物は、須恵器坏・高台坏、平瓦の他に、縄文土器（写真図版３－１）、古墳時代前期塩釜式土師器高坏の破片（写真図版３－２）と時代の異なる遺物が混在している。時期は、以前の調査成果から中世以降の時期が考えられる。

【SD6101河川跡】SD6100河川跡下で部分的に検出した。工事の及ばない深さについては、調査区が狭く、調査区の壁が崩落する危険があるため底面まで掘り下げていない。堆積土はオリーブ黒色～灰色の粘質シルト・細砂で、いずれも自然堆積で、特徴的に大きな石や流木が入る。この河川跡は、SD6100河川跡と重複する古い河川跡である。堆積土の特徴などから、以前の調査で検出したSD5161A河川跡に対応する可能性が考えられるが、部分的な調査のため詳細は不明である（以前の調査で検出したSD5174河川跡もSD5161A河川跡に対応する可能性がある）。遺物は堆積土から古代の土師器・須恵器の他に、古墳時代の土師器甕（写真図版３－４）、曲柄鍬（第５図１）など時代の異なる遺物が混在している。

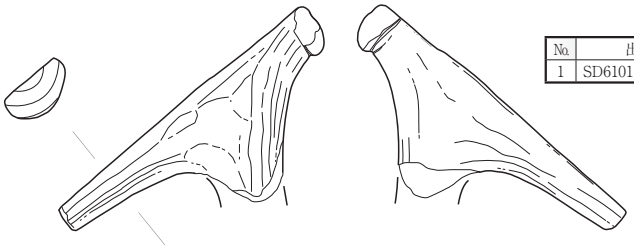
２）東　区（第６図）

【SF5252水田跡】

畦畔と水田耕作土の一部を確認したにすぎないが、水田跡を2ヵ所検出した。SD5289河川跡、SX5270道路跡と重複し、これらよりも新しい。この水田跡と畦畔跡は位置・方向・規模や堆積土の状況から、以前の調査で検出したSF5252水田跡の北の延長である。耕作土は２層確認でき、灰白色火山灰をブロック状に含む灰オリーブ色～灰色の砂質シルトである。遺物はロクロ調整の土師器坏・甕の小破片が少量出土している。



No.	土　色	土　性	備　考
1	オリーブ黒色（5Y3/2）	粘質シルト	層序Ⅱ層
2	オリーブ黒色（5Y3/1）	粘質シルト	SD6100河川跡堆積土
3	灰オリーブ色（5Y4/2）	粘質シルト	〃
4	灰オリーブ色（5Y4/2）	砂	〃
5	灰オリーブ色（5Y6/2）	砂	〃
6	灰色（5Y6/1）	砂	〃
7	灰オリーブ色（5Y6/2）	砂	SD6100河川跡堆積土
8	暗オリーブ色（5Y4/3）	砂質シルト	SD6101河川跡堆積土
9	オリーブ黒色（5Y4/3）	粘土	〃
10	灰オリーブ色(5Y5/3)	細砂	〃
11	オリーブ黒（5Y3/2）	粘質シルト	〃
12	灰色（7.5Y5/1）	細砂	〃　流木を多く含む



No.	出土遺構・層位	種　別	特　徴
1	SD6101河川跡・堆積土12層	木製品　曲柄鍬	膝柄　鍬台長さ13.2cm　幅3.0cm

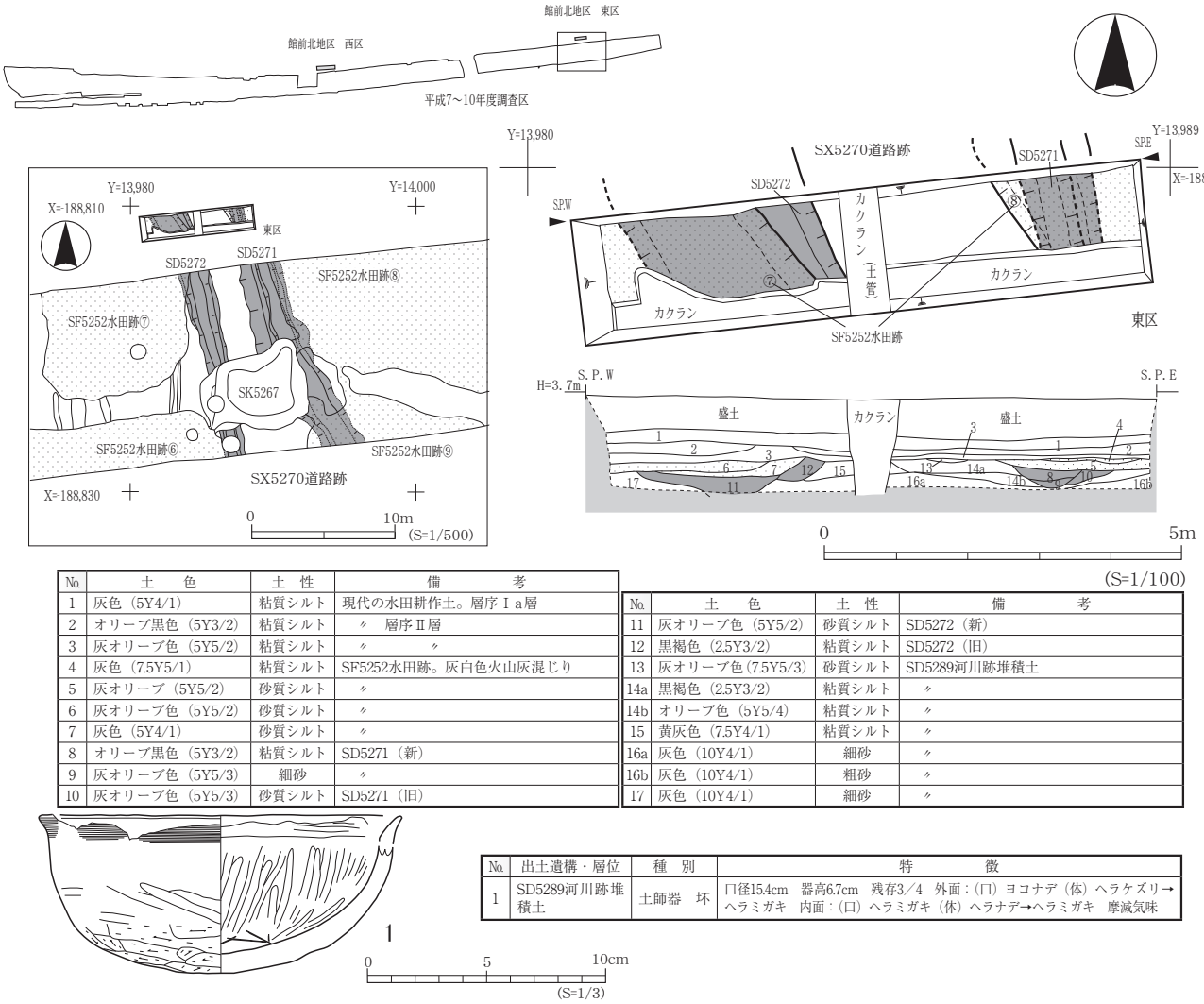
1

0　5　10cm
(S=1/3)

第５図　館前北地区西区　遺構配置図・断面図および出土遺物

【SX5270道路跡】

両側に素掘りの側溝（東：SD5171・西SD5172）を伴う南北方向の道路跡を検出した。SD5289河川跡、SF5252水田跡と重複し、SD5289より新しく、SF5252より古い。工事の及ばない深さについては、調査区が狭く、調査区の壁が崩落する危険性があるために底面まで掘り下げていない。この道路跡は側溝の位置・方向などから、以前の調査で検出したSX5270道路跡の北の延長である。SD5271・5272両側溝跡は２時期の変遷が認められた。



No.	土　色	土　性	備　考
1	灰色（5Y4/1）	粘質シルト	現代の水田耕作土。層序Ⅰa層
2	オリーブ黒色（5Y3/2）	粘質シルト	〃　層序Ⅱ層
3	灰オリーブ色（5Y5/2）	粘質シルト	〃　〃
4	灰色（7.5Y5/1）	粘質シルト	SF5252水田跡。灰白色火山灰混じり
5	灰オリーブ（5Y5/2）	砂質シルト	〃
6	灰オリーブ色（5Y5/2）	砂質シルト	〃
7	灰色（5Y4/1）	砂質シルト	〃
8	オリーブ黒色（5Y3/2）	粘質シルト	SD5271（新）
9	灰オリーブ色（5Y5/3）	細砂	〃
10	灰オリーブ色（5Y5/3）	砂質シルト	SD5271（旧）

No.	土　色	土　性	備　考
11	灰オリーブ色（5Y5/2）	砂質シルト	SD5272（新）
12	黒褐色（2.5Y3/2）	粘質シルト	SD5272（旧）
13	灰オリーブ色(7.5Y5/3)	砂質シルト	SD5289河川跡堆積土
14a	黒褐色（2.5Y3/2）	粘質シルト	〃
14b	オリーブ色（5Y5/4）	粘質シルト	〃
15	黄灰色（7.5Y4/1）	粘質シルト	〃
16a	灰色（10Y4/1）	細砂	〃
16b	灰色（10Y4/1）	粗砂	〃
17	灰色（10Y4/1）	細砂	〃

No.	出土遺構・層位	種　別	特　徴
1	SD5289河川跡堆積土	土師器　坏	口径15.4cm　器高6.7cm　残存3／4　外面：(口) ヨコナデ（体）ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：(口) ヘラミガキ（体）ヘラナデ→ヘラミガキ　摩滅気味

第６図　館前北地区東区　遺構配置図・断面図および出土遺物

路面は後世の削平によって残存しない。新しい道路の規模は側溝の心々間で約4.5mである。両側溝ともにほぼ同位置で造り替えられているが、新しい段階の側溝は若干西寄りに位置する。東側溝の新しい段階の規模は上幅約1.4m、下幅約0.2m、深さ約0.3mで、断面形は開き気味の「U」字形を呈する。西側溝の新しい段階の規模は上幅約2.0m、下幅は完掘しておらず不明で、深さは0.2m以上である。堆積土は、両側溝とも灰オリーブ色の粘質シルト～細砂の自然堆積である。これらの側溝跡から遺物は出土していない。

以前の調査からこのSF5270道路跡は南北大路から約140m東に位置し、「東１道路」に相当する可能性が考えられており、年代は概ね９世紀頃と考えられている。

【SD5289河川跡】

SF5252水田跡・SX5270道路跡下で検出した。この河川跡は位置・方向・堆積土の状況から、以前の調査で検出したSD5289河川跡の北の延長である。工事が及ばない深さについては、調査区が狭く、

調査区の壁が崩落する危険があるため底面まで掘り下げていない。堆積土はオリーブ色～黄灰色～灰色の細砂・粗砂で、いずれも自然堆積である。河川跡の全体規模は不明であるが、以前の調査成果から上幅最大約12.1m、最小4.8m、下幅最大7.6m、最小2.4m、深さ1m以上と考えられている。遺物は、古墳時代中期南小泉式の土師器坏（第６図１）が出土している。この河川跡は、これまで遺物の出土がなく、周囲の状況から古墳時代の河川跡と考えられていたが、今回の調査で古墳時代中期南小泉式期の河川の可能性が考えられる。

（2）後山地区

１）平成15年度の確認調査について

今回の確認調査で発見した遺構は、暫定２車線部分のＴ－５西半部で溝跡１条（SD6001溝跡）、４車線部分のＴ－10東半部で溝跡２条(SD6011･6012溝跡)である。SD6001溝跡は上幅約2.1m、下幅0.5m、検出長は４ｍほどである。SD6011溝跡は上幅1.6m、深さ0.2m、検出長2.3m、SD6012溝跡は上幅2.2m、深さ0.2m、検出長2.3mのいずれも南北方向の溝跡である。いずれも確認調査のため完掘していない。SD6001溝跡は調査区間の層序の関係から灰白色火山灰降灰以降のⅡ層を掘り込んでいることが判明している。このことから、灰白色火山灰降灰以降の溝跡と考えられる。また、SD6011・6012溝跡は、灰白色火山灰を含むⅣ層が覆っていることから灰白色火山灰降灰以前の溝跡と考えられる。遺物はＴ－5･6を中心に土師器小破片や平瓦などを出土しているほかは、丸瓦（写真図版３－14)、漆器椀（写真図版３－15）がある。

２）平成17年度の事前調査について

①現況と付近の地形

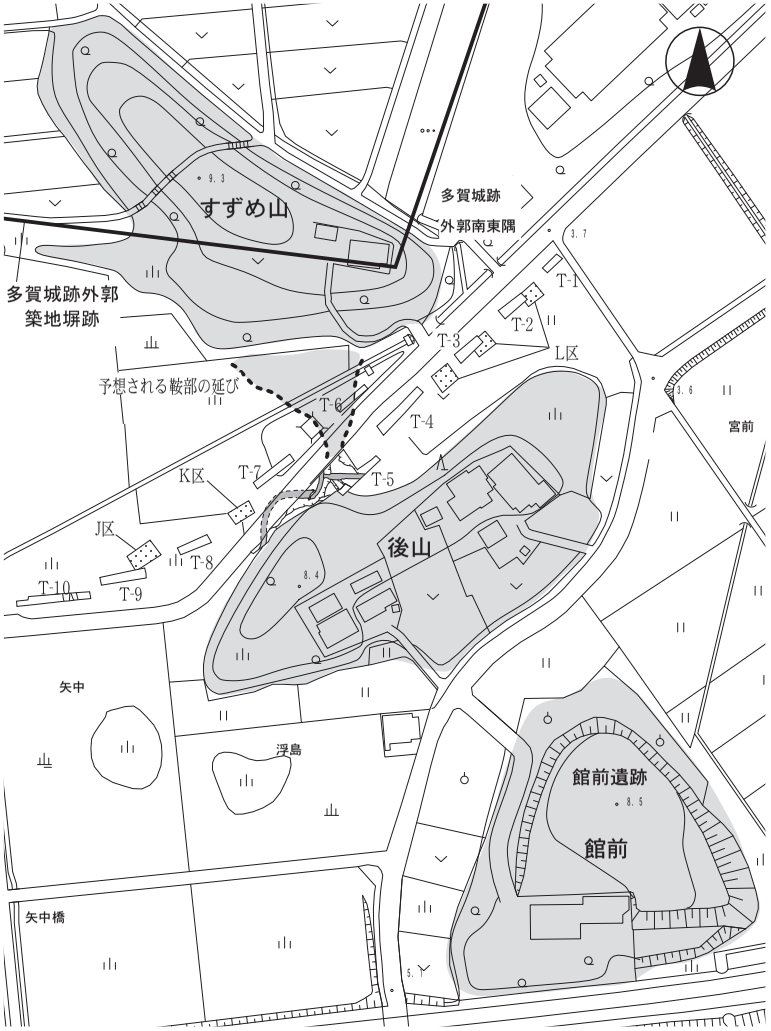
今回の調査は暫定２車線部分に係る後山の小丘陵北側斜面を対象とした調査である。発見した遺構は地形と密接に関係してくると考えられることから付近の地形を概観してみる。調査区北側には標高９ｍほどの小丘陵が北の多賀城台地から南南東方向に派生している。北から多賀城跡の外郭東南隅にあたる「すずめ山」の小丘陵が北西方向に延び、その南にはすずめ山と直交するように後山の小丘陵が南西方向に延びる。後山の範囲は160m×70mの菱形を呈する。さらに南には三角形を呈する館前の小丘陵が位置している。今回の調査区がある後山丘陵を詳しくみていくと、北西側はやや急な斜面で、南側から北東部は緩やかに下に傾斜する小丘陵である。現況は宅地、畑である。調査区は後山小丘陵の北西部に位置し、丘陵斜面から丘陵裾部にあたる。

②発見した遺構と遺物

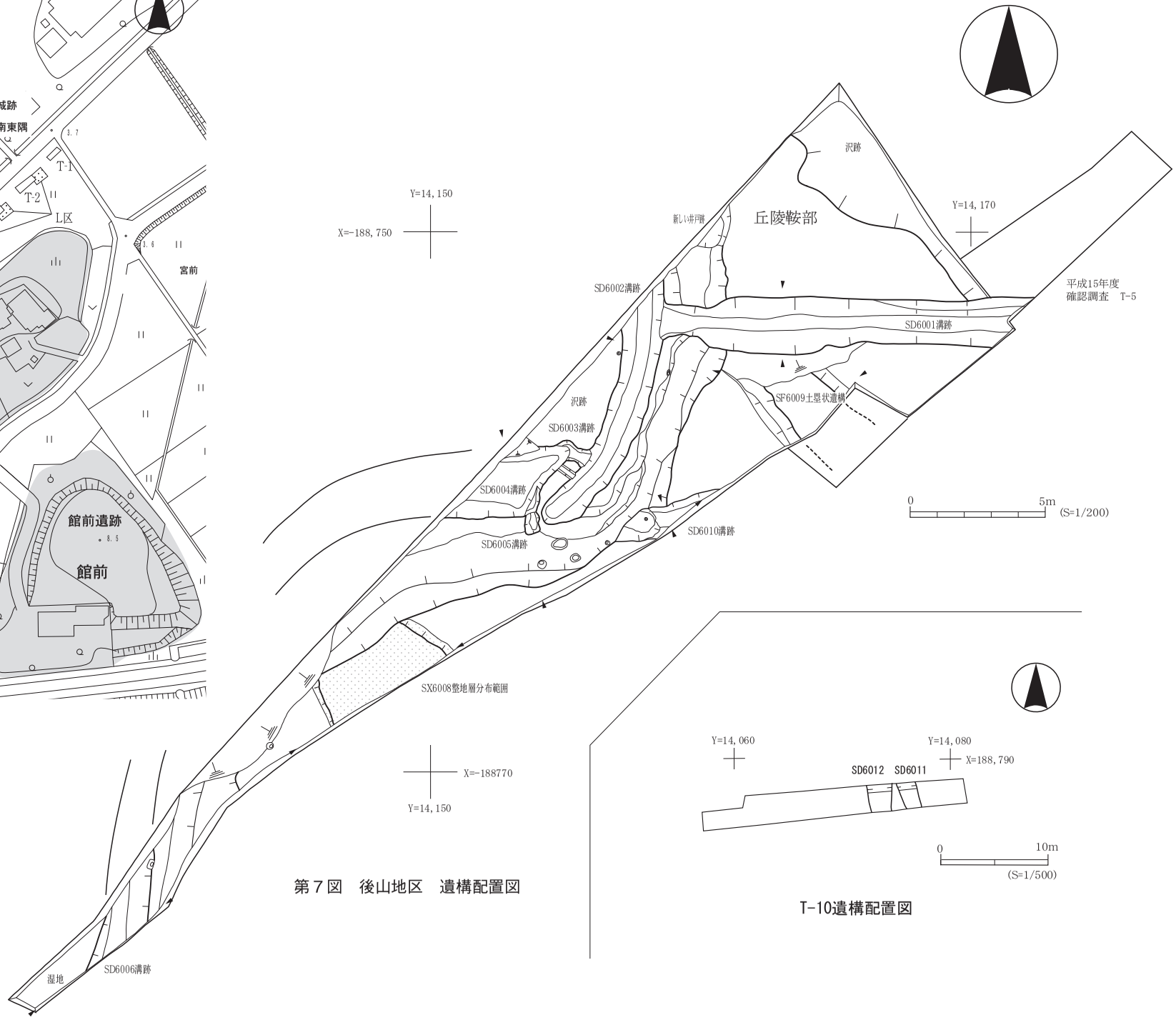
平成15年度の確認調査の成果を受けて、Ｔ－5付近の暫定２車線部分に係る後山の小丘陵末端斜面に調査区を設定した。遺構は区画溝跡６条、土塁状遺構１基、整地層１箇所、その他の溝跡１条、ピットなどを確認した。遺物は、須恵器、瓦、陶磁器、鉄滓、木製品などを出土した。

【丘陵を区画する施設】

今回の調査ではSD6001～6006・6010溝跡を検出している。この中でSD6001とSD6002、SD6002とSD6003、SD6003とSD6004、SD6004とSD6005は、それぞれ同時期に接続していた一連の溝である。また、SD6004とSD6006は、直接接続していないが、後述する丘陵側の平坦面が一連のものであるこ

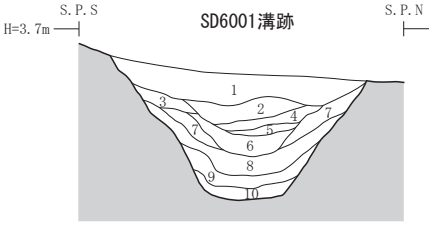


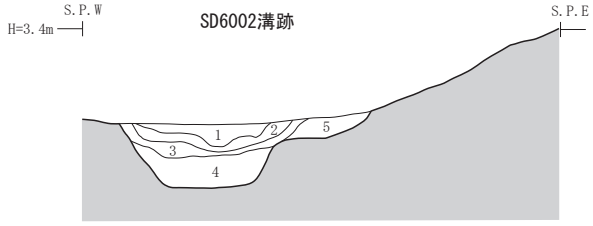
後山周辺の地形(S=1/25,00)



第７図　後山地区　遺構配置図

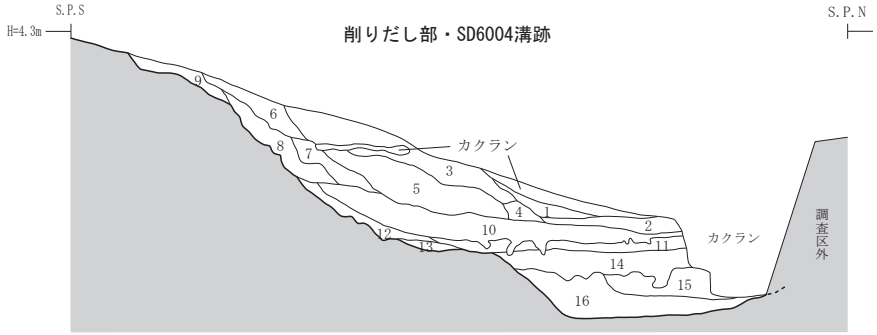
T-10遺構配置図





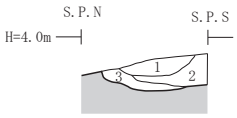
No.	土　色	土　性	備　考
1	黄褐色（10YR5/6）	粘質シルト	地山ブロック、小礫、植物遺体を少量含む
2	灰黄褐色（10YR6/2）	粘質シルト	地山ブロック、酸化鉄を含む
3	黄褐色（10YR5/6）	粘質シルト	地山ブロックを少量含む
4	にぶい黄橙色(10YR6/3)	粘土	しまりやや強い。酸化鉄含む
5	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土	〃
6	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘土	地山ブロックを下層部に含む
7	にぶい黄橙色(10YR6/4)	粘質シルト	酸化鉄含む
8	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	
9	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト	
10	にぶい黄橙色(10YR7/2)	シルト	

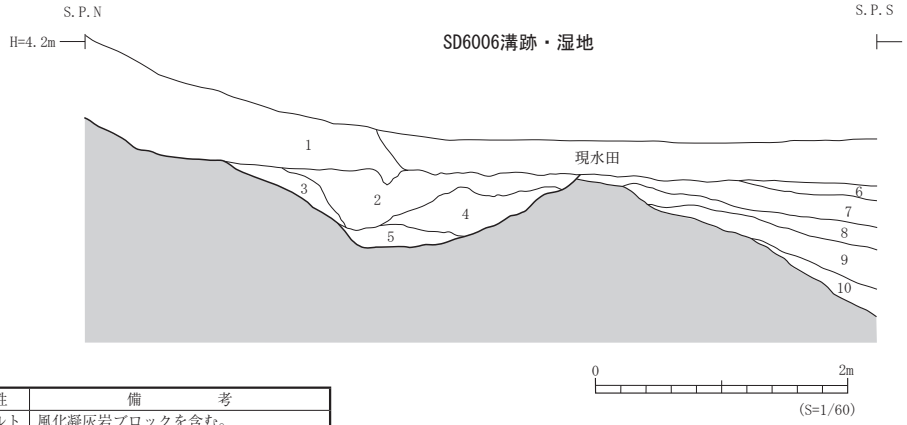
No.	土　色	土　性	備　考
1	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土	地山ブロック（大）を多量含む。人為
2	黒褐色（10YR3/2）	粘質シルト	部分的に砂、酸化鉄を含む
3	黒褐色（2.5Y3/1）	粘質シルト	地山ブロックを含む
4	黒褐色（2.5Y3/2）	粘質シルト	地山ブロックを多量含む
5	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	砂、地山ブロックを含む



No.	土　色	土　性	備　考
1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘質シルト	酸化鉄を含む
2	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土	地山（大）ブロックを少量含む
3	褐色（10YR4/6）	シルト	
4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	砂混じり
5	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭化物、地山粒若干含む
6	暗褐色（10YR3/4）	シルト	地山粒若干含む
7	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
8	褐色（10YR4/6）	シルト	地山粒少量含む

No.	土　色	土　性	備　考
9	褐色（10YR4/6）	粘質シルト	
10	灰黄褐色（10YR5/2）	粘質シルト	砂混じり
11	黒褐色（10YR2/3）	シルト	砂混じり
12	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	砂混じり
13	灰黄褐色（10YR4/2）	砂質シルト	砂を比較的多く含む
14	黒褐色（10YR3/2）	シルト	風化凝灰岩ブロックを多量含む
15	灰色（5Y4/1）	シルト	炭化物若干含む
16	灰オリーブ色（5Y4/2）	シルト	砂混じり

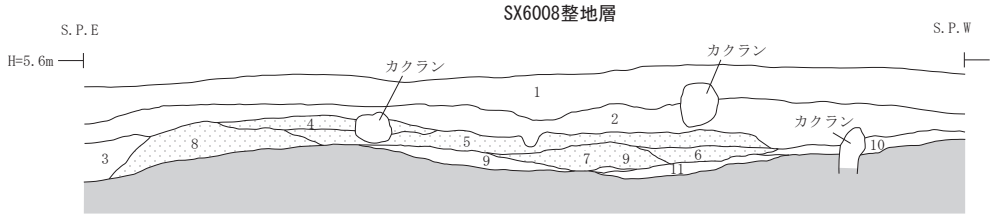




No.	土　色	土　性	備　考
1	褐色（10YR4/4）	粘質シルト	風化凝灰岩ブロックを含む。
2	暗褐色（10YR3/3）	粘質シルト	風化凝灰岩ブロックを若干含む
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	風化凝灰岩ブロックを含む

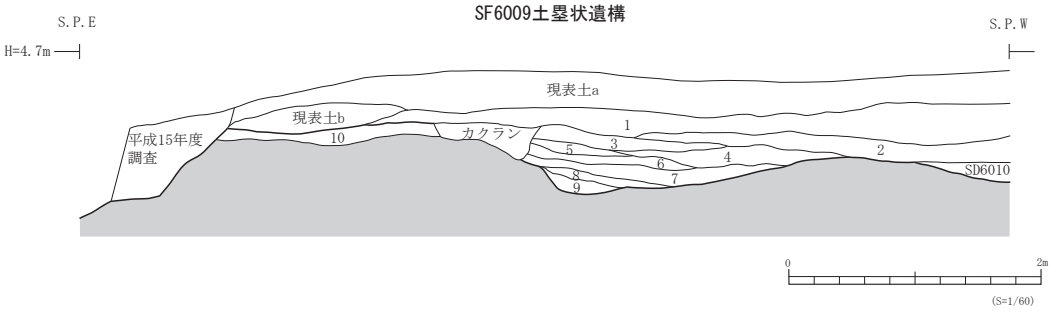
No.	土　色	土　性	備　考
1	灰黄褐色（10YR4/2）	粘質シルト	現表土。層序Ｉｂ層
2	黒褐色（10YR2/3）	粘質シルト	SD6006堆積土。炭化物含む。植物遺体含む
3	黒褐色（10YR3/2）	粘質シルト	〃　風化凝灰岩ブロックを中量含む
4	暗灰黄色（2.5Y4/2）	粘質シルト	〃　地山ブロックを少量含む。
5	暗灰黄色（2.5Y4/2）	粘質シルト	〃　地山ブロックを含む。下層に砂を多く含む
6	オリーブ黒（5Y2/2）	粘質シルト	湿地堆積土。植物遺体含む（スクモ層）
7	オリーブ黒色（5Y3/3）	粘質シルト	〃　風化凝灰岩ブロックを若干含む。グライ化
8	黒褐色（2.5Y3/2）	粘質シルト	〃　植物遺体含む
9	黒褐色（2.5Y3/1）	粘質シルト	〃　風化凝灰岩ブロックを若干含む
10	灰色（5Y4/1）	粘質シルト	砂混じり

第８図　後山地区　遺構断面図



No.	土　色	土　性	備　考
1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	現表土。腐植土
2	褐色（10YR4/4）	シルト	風化凝灰岩ブロックを少量含む
3	黒褐色（10YR2/3）	シルト	地山ブロックを少量含む
4	暗褐色（10YR3/4）	シルト	SX6008整地層。風化凝灰岩ブロックを多量含む
5	褐色（10YR4/6）	シルト	〃　風化凝灰岩ブロック、地山ブロックを含む
6	暗褐色（10YR3/4）	シルト	〃　風化凝灰岩ブロックを中量含む

No.	土　色	土　性	備　考
7	褐色（10YR4/4）	シルト	SX6008整地層。風化凝灰岩ブロック、地山ブロックを含む
8	暗褐色（10YR3/3）	シルト	〃　風化凝灰岩ブロック、地山ブロックを少量含む
9	褐色（10YR4/4）	シルト	地山ブロック若干含む。砂混じり
10	褐色（10YR4/4）	シルト	地山粒若干含む比較的均質層。しまりやや強い
11	褐色（10YR4/4）	シルト	しまり非常に強い



No.	土　色	土　性	備　考
1	褐色（10YR4/6）	シルト	風化凝灰岩ブロック含む
2	黄褐色（10YR5/6）	シルト	
3	褐色（10YR4/6）	シルト	SF6009崩落土。地山粒を若干含む
4	黄褐色（10YR5/8）	シルト	〃　地山粒を少量含む
5	褐色（7.5Y4/6）	シルト	〃　地山粒を中量含む

No.	土　色	土　性	備　考
6	褐色（7.5Y4/6）	シルト	SF6009崩落土。地山粒を中量含む。
7	褐色（7.5Y4/6）	シルト	〃　地山粒・地山ブロックを含む。
8	黄褐色（10YR5/8）	シルト	〃　地山粒、地山ブロックを多量含む。砂混じり
9	黄褐色（10YR5/8）	シルト	〃　地山粒、地山（大）ブロックを多量含む
10	褐色（10YR4/4）	シルト	旧表土。砂混じり

第９図　後山地区遺構断面図

とから、接続する一連の溝と考えられる。以上のことからSD6010溝を除くSD6001～SD6006溝は、丘陵裾部や北に隣接する「すずめ山」丘陵との鞍部にあるなどの位置関係から後山丘陵を区画している一連の溝跡と考えられる。

なお、溝の接続部は、いずれの場合にも底面の深さが異なることから段差がついている。

これらの溝の丘陵側の斜面は、丘陵平坦部からやや急角度で削り出されているが、中程で幅0.2～0.4mほどの狭い平坦面が作り出され、そこから溝が掘削されている。溝と斜面の堆積土が共通することから、斜面の削り出しと溝の掘削は同時に行われた一連の作業とみられる。溝の深さは丘陵側で約2.2m、湿地側で約1.7mである。

堆積土は灰黄褐色・暗褐色のシルトや粘土質シルトが主体の自然堆積で、削りだし部分の堆積土上部から近世陶器の破片（写真図版３－８）、鉄滓（写真図版３－13）が出土している。

〔SD6001溝跡〕（第８図）

調査区東側の尾根鞍部に位置する。重複関係はなく、SD6002溝跡と西側でＴ字状に接続する。尾根鞍部を横断するように位置する。検出長は約13mで、東西方向に直線的に延びる。SD6002溝跡とは底面に約0.3mの段差があり、SD6002溝跡が一段低くなる。東側は調査区外へと延びる。規模は上幅約1.6～2.1m、下幅約0.5m、深さ約1.0mで、断面形は逆台形を呈し、壁はやや角度をもって立ち上

がり、底面はほぼ平坦で、東に向かって下に傾斜している。堆積土は、にぶい黄褐色～灰黄褐色のシルト～粘質シルトを主体とし、いずれも自然堆積である。遺物は土師器坏・平瓦の破片、鉄滓が少量出土している。

〔SD6002溝跡〕（第８図）

調査区東側の丘陵裾部に位置する。重複関係はなく、SD6001・6003溝跡と接続する。丘陵裾部に並行し、検出長約10mで南北方向に沢に向かってわずかに沢側に弯曲しながら延びる。東側のSD6001溝跡との接続部では底面に約0.3mの段差があり、SD6002溝跡が一段低くなる。西側のSD6003溝跡との接続部では底面に約0.2mの段差があり、SD6002溝跡が一段低くなる。規模は上幅約1.2～1.5m、下幅約0.5m、深さ約0.5mで、断面形は逆台形を呈し、壁はやや角度をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦で、北に向かって下に傾斜している。堆積土は５層に分かれ、１層は地山ブロックを多量に含む灰黄褐色粘土で埋め戻されている。２～５層は黒褐色～にぶい黄褐色の粘質シルト～シルトで、いずれも自然堆積である。遺物は須恵器甕、平瓦（第10図２）、丸瓦、砥石（第10図１）、木製品（第10図３）などがある。

〔SD6003溝跡〕（第８図）

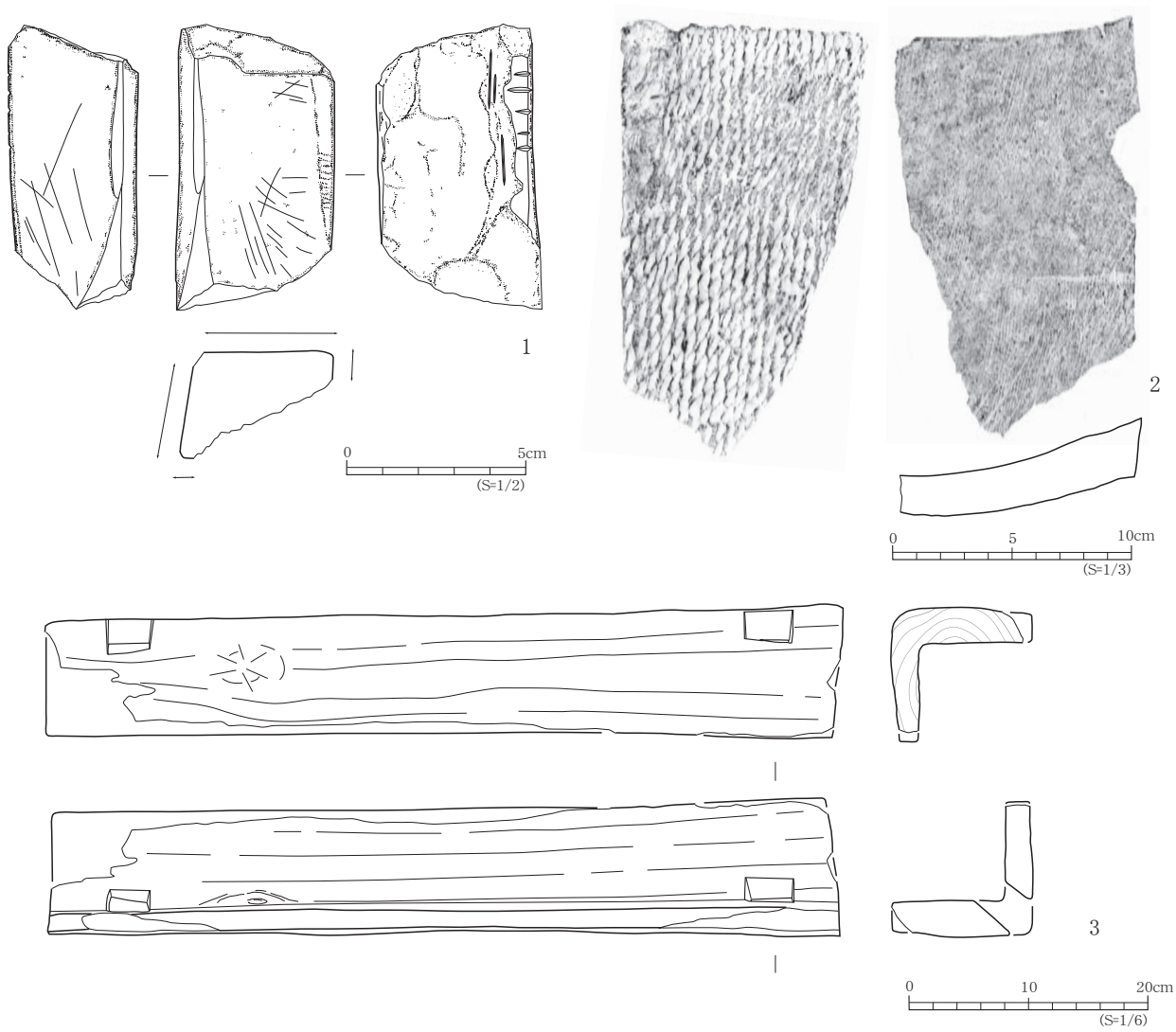
調査区中央の丘陵裾部に位置する。重複関係はなく、SD6002・6004溝跡と接続する。丘陵裾部に並行し、検出長は1.3mである。東側のSD6002溝跡との接続部では、底面に約0.2mの段差があり、SD6002溝跡が一段低くなる。西側のSD6004溝跡との接続部では、底面に約0.3mの段差があり、SD6004溝跡が一段低くなる。規模は上幅0.5m、下幅0.3m、深さ0.1mである。断面形は逆台形を呈し、壁はやや角度をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦で、西に向かって下に傾斜している。堆積土は黒褐色のシルトの自然堆積である。

〔SD6004溝跡〕（第８図）

調査区中央の丘陵裾部に位置する。重複関係はなく、SD6003・6005溝跡と接続する。丘陵裾部に並行し、検出長は約２mで東西方向に直線的に延びる。北東側のSD6003溝跡との接続部では、底面に約0.3mの段差があり、SD6004溝跡が一段低くなる。南東側のSD6005溝跡との接続部では、底面に約0.5mの段差があり、SD6004溝跡が一段低くなる。溝跡の西側は調査区外へと延びる。規模は上幅約2.5m、下幅約1.5m、深さ約0.5mで、断面形は逆台形を呈し、壁はやや角度をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色～灰色の粘質シルト～シルトの自然堆積である。遺物は、平瓦の破片が比較的多く出土しているほかは、土師器・須恵器の小破片が少量出土している。

〔SD6005溝跡〕（第８図）

調査区中央の丘陵裾部に位置する。重複関係はなく、SD6004溝跡東側の南東隅と接続する。丘陵裾部に直交し、検出長は約1.8mで南北方向に直線的に延びる。北側のSD6004溝跡との接続部では、底面に約0.5mの段差があり、SD6004溝跡が段状に低くなっている。規模は上幅約0.6m、下幅約0.3m、深さ0.2mである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は黒褐色のシルトの自然堆積である。遺物は出土していない。



No.	出土遺構・層位	種　別	特　　徴
1	SD6002堆積土	砥石	長さ8.0cm　幅4.3cm　厚さ3.2cm　砂岩
2	SD6002堆積土	平瓦	凹面：布目　凸：縄叩き目
3	SD6002堆積土	木製品　部材	長さ66.3cm　幅10.5cm　厚さ2.5cm　ホゾ穴２ヵ所あり

第10図　後山地区出土遺物

〔SD6006溝跡〕（第８図）

調査区西側の丘陵裾部に位置する。重複関係はない。丘陵裾部に並行し、検出長は約２ｍで、南北とも調査区外へ延びる。規模は上幅約1.5m、下幅約0.7m、深さ0.7mである。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色～暗灰黄色のシルトの自然堆積である。遺物は出土していない。

【SX6008整地層】（第９図）

調査区西側の丘陵部平坦面で検出した。規模は、奥行き1.8m以上、幅５ｍで、北側は道路建設時に切り取られている。整地層は風化凝灰岩ブロックを含む褐色～暗褐色のシルトである。層厚は0.1～0.3mで、やや北に向かって下へ緩く傾斜する。遺物は出土していない。

【SF6009土塁状遺構】（第９図）

調査区東側の丘陵部で、北西から南東方向に延びる地山及び旧表土を削り出した土手状の高まりを検出した。区画の溝跡に関連する削り出し部と重複するが、新旧関係は不明である。検出長は約２ｍで北と東側は削平を受けて不明だが、南側は調査区外へ延びる。規模は上幅1.6ｍ、下幅3.2ｍ、高さ0.6ｍである。積土は確認されなかったが、西側の平坦部には地山粒・地山ブロック混じりの褐色～黄褐色のシルトが地山を切り出した窪みに堆積している。この堆積土の特徴からSF6009土塁状遺構は土塁の地山削り出しの基底部の可能性がある。遺物は堆積層中から平瓦、窯壁、鉄滓（写真図版３－12）などがある。

【その他の施設】

〔SD6010溝跡〕（第８図）

調査区中央の丘陵部に位置する。区画の溝跡に関連する削り出し部と重複するが、新旧関係は不明である。検出長約２ｍで東西方向に延び、西側は沢に接続し、東側は調査区外へと延びる。規模は上幅約1.1ｍ、下幅約0.5ｍ、深さ約0.1～0.2ｍで、断面形は開き気味の「U」字形を呈する。底面の一部に段差があり、沢に向かって一段低くなる。堆積土は褐色～にぶい黄褐色のシルトの自然堆積である。遺物は、平瓦が数点出土している。

Ⅳ章　ま と め

館前北地区

１．西区では以前の調査で確認できなかった河川跡を2条確認した。

２．東区では以前の館前地区の調査で検出した平安時代のSF5252水田跡・SX5270道路跡の北の延びを確認した。また、古墳時代のSD5289河川跡の北の延びを確認し、年代的には古墳時代中期南小泉式期の可能性が考えられる。

後山地区

１．確認調査

発見された遺構はＴ－5で溝跡１条、Ｔ－10で溝跡２条である。SD6001溝跡はⅡ層を掘り込んでいることから灰白色火山灰降灰以降の溝跡と考えられる。また、SD6011・6012溝跡はいずれも灰白色火山灰降灰前の古代の溝跡と考えられる。これらの他に、周囲のＴ－1～5・Ｔ－6の東半部とＴ－7～Ｔ－9にかけては灰白色火山灰以降に形成された湿地が堆積しており、古代の遺構等は検出されなかったが、灰白色火山灰をブロック状に含む灰白色火山灰降灰以降の水田跡が後山地区にも延びていることを確認した。Ｔ－10の下層からは河川由来と考えられる水成堆積土があり、古墳時代の河川の流路の存在する可能性が考えられる。

また、Ｔ－5西側･Ｔ－6西側では他のトレンチより一段高い層序を示すことから後山とすずめ山の小丘陵間に位置する丘陵鞍部と考えられ、上部は削平を受けたものと考えられる。この鞍部上には

SD6001溝跡以外のさらなる遺構がある可能性が考えられる。

２．事前調査

後山丘陵の北西部を区画する溝跡を発見した。SD6001溝跡は後山丘陵とすずめ山間の丘陵鞍部を横断して位置し、SD6002・6003・6005溝跡は丘陵裾部に並行して位置している。構造的に溝底面に傾斜をつけ、他の溝と段差を持ちながら接続するという特徴を持つ。これらの溝跡は、層序から灰白色火山灰降灰以降の時期の後山丘陵を区画する溝跡と考えられる。また、これらの溝とは別の時期にSF6009土塁状遺構の存在から丘陵鞍部に土塁の存在が考えられる。また、丘陵平坦部末端に整地層（SX6008整地層）が存在することなどから、後山の丘陵頂部平坦部には、時期は不明ながら何らかの建物等の遺構がある可能性が考えられる。

【引用・参考文献】

多賀城市教育委員会（1980）:『館前遺跡』多賀城市文化財調査報告書第１集

多賀城市史編纂委員会（1997）:『多賀城市史』第１巻　原始・古代・中世

多賀城市教育委員会（1992）:『山王遺跡－第10次調査概報－』多賀城市文化財調査報告書第27集

多賀城市教育委員会（1999）:『市川橋遺跡－第23・24次調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第55集

多賀城市教育委員会（1991）:『市川橋遺跡－第９次調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第26集

多賀城市教育委員会（1992）:『山王遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第29集

宮城県教育委員会（1994）:『山王遺跡八幡地区の調査』宮城県文化財調査報告書第162集

宮城県教育委員会（1994）:『山王遺跡－仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書－古墳時代中期遺物包含層編』宮城県文化財調査報告書第161集

宮城県教育委員会（1995）:『山王遺跡Ⅱ－多賀前地区遺構編－』宮城県文化財調査報告書第167集

宮城県教育委員会（1996）:『山王遺跡Ⅳ－多賀前地区考察編－』宮城県文化財調査報告書第171集

宮城県教育委員会（1998）:『山王遺跡町地区の調査－県道「泉－塩釜線」関連調査報告書Ⅱ－』宮城県文化財調査報告書第175集

宮城県教育委員会（2001）:『市川橋遺跡の調査－県道「泉－塩釜線」関連調査報告書Ⅲ－』宮城県文化財調査報告書第184集

宮城県教育委員会（2003）:『市川橋遺跡』宮城県文化財調査報告書第193集

宮城県教育委員会（2004）:『山王遺跡伊勢地区の調査－県道「泉塩釜線」関連調査報告書Ⅴ－』

宮城県史刊行会（1954）:『宮城県史』第24巻

宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所（1982）:『多賀城跡　政庁跡本文編』

宮城県多賀城跡調査研究所（1976）:「第26・27次調査」『年報』1975

宮城県多賀城跡調査研究所（1978）:「第30次調査」『年報』1978

写　真　図　版

1．館前北地区西区（東から）

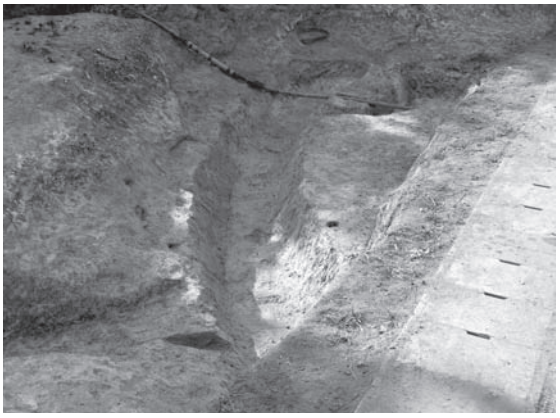
2．館前北地区東区（東から）

3．後山地区調査区全景（北から）

写真図版 1

1．SD6001溝跡（西から）

2．SD6001溝跡断面（東から）



3．SD6002溝跡（北西から）

4．SD6003・6004・6005溝跡（西から）

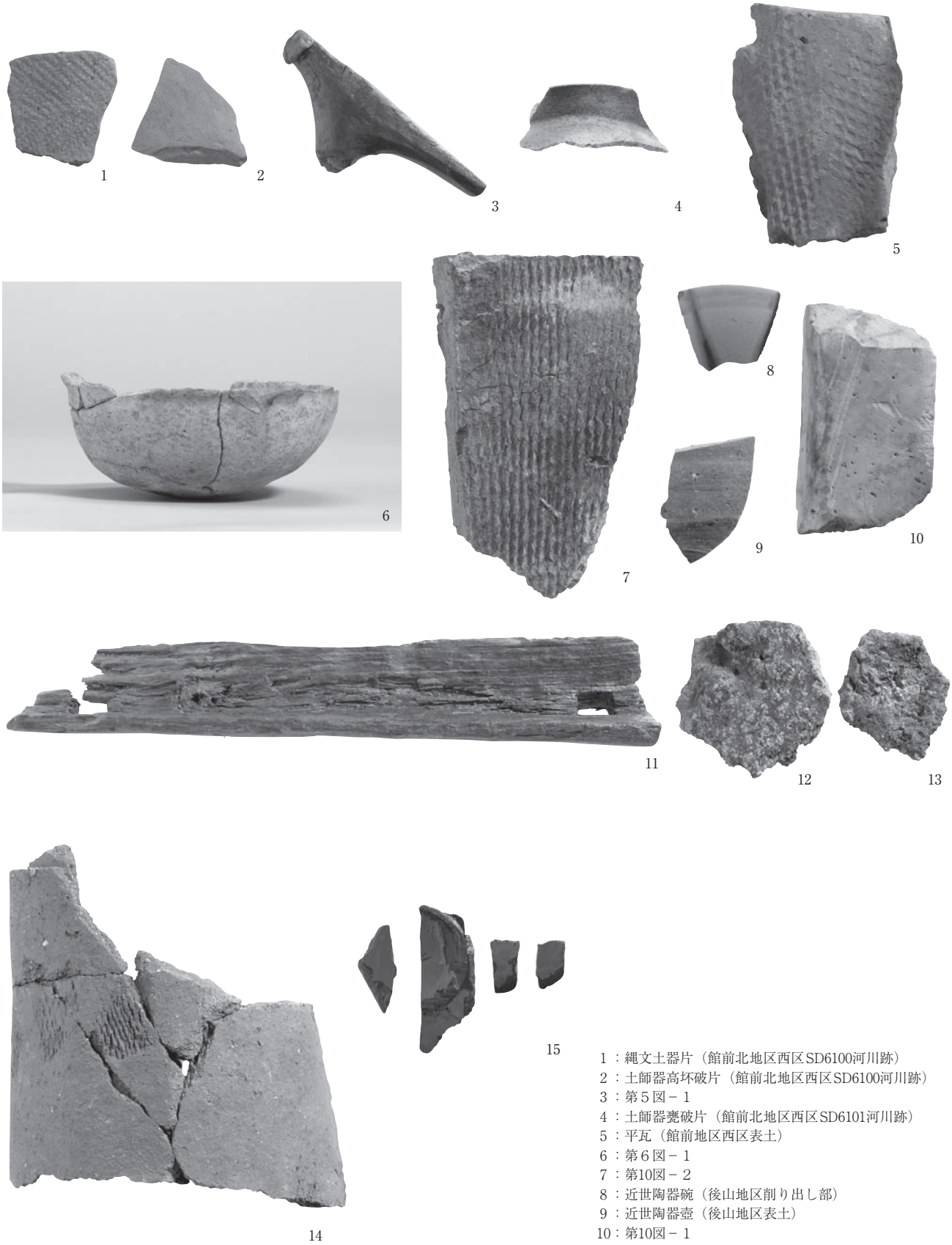
5．SD6010溝跡（西から）

6．SD6006溝跡（北から）

7．SF6009土塁状遺構（北から）

8．SX6008整地層（西から）

写真図版２



1：縄文土器片（館前北地区西区SD6100河川跡）
2：土師器高坏破片（館前北地区西区SD6100河川跡）
3：第５図－１
4：土師器甕破片（館前北地区西区SD6101河川跡）
5：平瓦（館前地区西区表土）
6：第６図－１
7：第10図－２
8：近世陶器碗（後山地区削り出し部）
9：近世陶器壺（後山地区表土）
10：第10図－１
11：第10図－３
12：鉄滓（後山地区SF6009土塁状遺構）
13：鉄滓（後山地区削り出し部）
14：丸瓦（後山地区T2堆積土）
15：漆器椀（後山地区T7湿地）

写真図版３

報　告　書　抄　録

ふりがな	いちかわばしいせき
書名	市川橋遺跡
副書名	県道『泉－塩釜線』関連調査報告書Ⅵ
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第209集
編著者名	大和幸生　佐藤貴志
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980－8423　宮城県仙台市青葉区本町三丁目８－１　TEL 022－211－3682
発行年月日	西暦　2007年３月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
市川橋遺跡（いちかわばしいせき）	宮城県多賀城市（みやぎけんたがじょうし） 市川字館前（いちかわあざたてまえ）・後山（うしろやま）	042099	18008	38度 18分 10秒	140度 59分 30秒	後山地区 20031001～ 20031106 館前北地区 20041018～ 20041105 後山地区 20051101～ 20051124	後山地区 確認調査 約413㎡ 館前北地区 事前調査 約44㎡ 後山地区 事前調査 約225㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	地区	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
市川橋遺跡	集落都市	後山地区確認調査	古代・中世以降	溝跡	瓦・陶磁器・漆器	
		館前北地区事前調査	古墳・古代中世	道路跡・水田跡・河川跡	土師器・須恵器 木製品	
		後山地区事前調査	古代以降（灰白色火山灰降灰以降）	溝跡・土塁状遺構・整地層	瓦・陶磁器・碗形滓・木製品・石製品	

宮城県文化財調査報告書第209集

市川橋遺跡の調査
－県道『泉－塩釜線』関連調査報告書Ⅵ－

平成19年３月19日印刷
平成19年３月23日発行

発　行　宮　城　県　教　育　委　員　会
仙台市青葉区本町三丁目８番１号

印　刷　株式会社　東　北　プ　リ　ン　ト
仙台市青葉区立町24-24